

Title	讀史叢録(内藤虎次郎著, 弘文堂書房發行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.147(655)- 148(656)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

讀史叢錄

(内藤虎次郎著)
弘文堂書房發行

曩に研幾小録を公にし、支那古典學の新らしい研究方法を提唱された内藤湖南博士は、今回また讀史叢錄といふ支那史に關する一大論文集を刊行さるるに至つた。博士は博覽強記、支那の古代近代及び金石學に造詣深きことを以て、學界から等しく尊崇されてゐる支那學の權威である。従つて本書に收められた論文にはまた其の方面に關係したものが少くない。

本書に蒐録されてゐる論文は、主として藝文、史林の二雜誌に掲載されたもので、博士の言の如く、各篇の本文は、其の誤植に係る者等の外、成るべく原文のまゝとして改竄が加へられておらず、其の記述論說の誤謬不當なもの、若しくは、増補を要するものは、各篇に添へられた附記或は附註に於て之が指摘訂正を試みられてゐる。且又、博士の論文に關係ある他の學者の論文も成るべく其の標題を掲げて讀者の檢索の便に供されたことは、寔に本書の一大特色であると同時に、われらを示唆すること測り知ることの出來ぬものがある。われらが博士に深く謝する所以も亦この點に存する。次に本書の目次を列擧する。

車彌呼考、倭面土國、新羅眞興王巡境碑考、明東北疆域辨誤(附

書評

奴兒干永寧寺碑記)、清朝姓氏考、清朝開國期の史料、都爾鼻考、清朝初期の繼嗣問題、蒙古開國の傳説、秦邊紀略の噶爾且傳、再び秦邊紀略に就て、三たび秦邊紀略に就て、燒失せる滿蒙文獻經高昌國の紀年に就て、堯典の歌永言聲依永二句に就て、王亥、續王亥、地理學家朱思本、樂浪遺跡出土漆器の銘文、再び樂浪出土の漆器銘文に就て、集人石と十二支神象とに就て、禮部志稿解題、憲臺通紀考證、大英博物館所藏太平天國史料、近獲の二三史料、奴兒干永寧寺二碑補考、清朝開國期の史料補錄、三たび秦邊紀略に就て補錄。

車彌呼考の一篇は、博士が明治四十三年七月、藝文に發表された當時、少からず學界の注意を喚起した雄篇であつて、倭國女王車彌呼の事に關し、爾來二十一年間に亘り、多くの論争を見るに至つた。而して博士は魏書倭人傳の邪馬臺とは大和朝廷の王畿であり、女王車彌呼とは倭姫命であると論斷されてゐる。尙ほ附記に於て、「余が此篇を出せる直後、已に自説の缺陷を發見せし者あり、即ち車彌呼の名を考證せる條中に古事記神代卷にある火之戶幡姫兒、及び萬幡姫兒の二つの姫兒の字を本居氏に従ひて、ヒメユと讀みしは誤にして、平田氏のヒメノユと讀みしが正しきことを認められたれば、今の版には之を改めたり」といふ風に、種々訂正を試みられてゐる。

倭面土國の篇は、倭面土をヤマトと讀む理由を述べられたもので、前篇車彌呼と併せ讀むべき篇である。

「清朝姓氏考」は清朝の姓氏といはる愛親覺羅氏に關する精深な研究である。

(六五)

一四七

「清朝開國期の史料」に於て、博士は支那を統一した帝室の歴史としては、其の統一の全く成るまでを開國期中に包有させるのは、至當であるけれども、清朝の統一は、明朝などは、少し相違があつて、統一者は國內から起つたのでなく、域外から入り込んだのであるから、其の侵入が已に一紀元を作る價值がある。故に此にはやはり普通の入關以前を一期とする習慣に従つて、開國期即ち入關前と解し去る」といはれ、此時の史料を、(一)清朝人自身の手に残れる者、(二)明人の手に残れる者、(三)朝鮮其他の國人の手に残れる者(日本人の手によりて傳來せる史料なども此中に入る)等の三種に分たれ、此篇に於ては第一の分だけを即ち三期實錄、滿洲實錄、漢文舊檔、滿文舊檔等について述べられてゐる。

「都爾尊考」は一二の材料を提出されて、故箕内博士の説を補はれたものである。

「王亥」は王靜安の説に本づいて、夏殷人の命名、並びに其の古傳説等に關する考證を試みられたものである。

「續王亥」は靜安の「殷虛卜辭中所見先公先主考」の大意を節録し、之に對する博士の卓見を披瀝されたものである。

「大英博物館所藏太平天國史料」は、大英博物館所藏の太平天國史料及びゴルドン文牘について述べられたものである。該博物館に藏せらるる史料は貴重なるものであるが、此史料の邊録に最初從事されたのは、わが慶應大學の教授で、「史學」を創刊された故法學博士田中萃一郎先生である。先生が明治三十八年英獨に留學された時、日々大英博物館に於て逡寫された太平天國に關する史料

は、學界未發表の至寶であつたのである。内藤博士が先年大英博物館に於て逡寫された史料と、同じく稻葉君山氏の邊録された史料と、田中先生のこの史料と、都合三様の寫本を校對して完全な底本を作り、不日學界に發表されることになつたのは、學界のため寔に祝福すべきことといはなければならぬ。

「新羅眞興王巡境碑考」、「明東北疆域辨誤附奴兒干永寧寺碑記」、「高昌國の紀念に就て」、「近獲の二三史料」の中に收められた高句麗人の三墓志の如きは、博士ならては手のつけられぬものばかりである。尙ほ本書には貴重な圖版が少からず、收められてゐる。

京大の講壇を去られてから已に三年、豐饒として堂々支那學に精進する博士は寔に學界の至寶といはなければならぬ。その懇懇冥煩を顧みず、かゝる粗笨な紹介を致して余は、博士の寛恕を希ふて止まない次第である。(宮島貞亮)

朝鮮支那文化の研究

(京城帝國大學法文學部發行)
刀江書院發行

本書は、京城帝國大學法文學部第二部(哲學、史學、文學部門)編纂の第一輯である。大學が既に存在する以上刊行物なり雜誌なりを通じてその業績を天下に紹介することは極めて必要である。

雜誌發刊は近時の流行であるが京城大學がその時流を追はず、内容ある膨大な論文集を發行して是に代へたのは學界にとつて悦ぶべき事柄である。今此處にそのあつめられた諸論文を讀み得た範圍に於て紹介して見る。卷頭を飾るのは、今西條博士の「湧水考」である。博士は、水誌に列・帶・洎三水のことを論ずる豫定なりし